

令和5年12月15日

下野市議会議長 石田陽一様

教育福祉常任委員会

委員長 伊藤陽一

教育福祉常任委員会行政視察報告書

議会閉会中、当委員会の行政視察を実施しましたので、その結果について報告いたします。

1. 視察期日及び視察地

令和5年10月18日 高知県南国市
10月19日 香川県高松市

2. 参加者

委員長	伊藤陽一	副委員長	山下みゆき
委員	大島昌弘	委員	相澤康男
委員	鈴木一司		

3. 視察事項

「農福連携について」（高知県南国市 エンジェルガーデン南国）

「高松第一学園（小中一貫校）について」（香川県高松市）

4. 視察内容

(1) 高知県南国市

南国市は人口約4万6,000人、面積125.30平方キロメートルで高知県の中央部に位置し、土佐の稲作の発祥の地といわれている。田村を中心に遺跡が豊富で、古墳は小丘陵の山上、山麓に存在し80基に及ぶ。古くは約1300年前に国府が置かれ、土佐の中心地として栄えた。

エンジェルガーデン南国は、高知県南国市にある、障がい者就労継続支援B型事業所で有機JAS認証取得の自家農園にて、グアバやへちま、柚子、露地野菜などを栽培し、自社工場で加工、商品化し販売している。代表の西川一司氏が、特別支援学校で教員を32年間経験したのちに早期退職をして、教え子たちの活躍できる場として2017年に設立された。「エンジェルガーデン」という名前は、施設利用者である障がい者といわれている方々がピュアな心を持つ天使のようで、その心を大切にしたいと名付けられた。現在、24名の施設利用者に対し、職員11名が指導しているが、ここでは、施設利用者は親しみを込めて「メンバー」と呼ばれ、全てのスタッフが働くことの幸せを感じ、自立できる環境づくりを目指して、日々活動している。

仕事をしやすい環境づくりとしては、施設利用者が作業しやすいように、グアバ茶の商品の1袋に入っているティーバッグの数を間違えないよう、くぼみのあるトレイにティーバッグ一つひとつを置いて管理したり、商品ラベルを貼る作業も補助具を作り、それに合わせてきれいに貼れるようにしたりするなど、細かいところにも施設利用者のことを考えた効果的な工夫が見られた。

2018年農林水産省よりエンジェルガーデン南国は、6次産業化に基づく総合化事業計画に認定された。「6次産業化」とは、農林漁業者を1次産業とし、加工を2次産業、流通・販売を3次産業として、1次産業×2次産業×3次産業のかけ算の答えである6の意味で6次産業と言われているが、エンジェルガーデン南国は、農園運営と食品加工、販売を同時に行い、6次産業化を達成している。

就労継続支援B型事業所1か月の工賃の全国平均は2021年時点で1万6,507円、高知県平均は2022年時点で2万969円となっているが、エンジェルガーデン南国では、2023年4月現在で3万6,000円を達成している。しかし、まだまだ低い水準だと感じているとのことであった。施設利用者は障がい者年金を月6～7万円

受給しており、工賃と合わせて月10万円前後が手元に入ることになるが、その金額では自立には遠く、余暇も十分に楽しむことができない。そこで、エンジェルガーデン南国では、SDGsの目標として、2030年までに平均工賃を7万円にすることを宣言している。

(2) 香川県高松市

高松市は人口約41万1,000人、面積375.42平方キロメートルで、多島美を誇る波静かな瀬戸内海に面し、人々の暮らしや経済・文化など様々な面において、瀬戸内海との深いかかわりの中で、県都として、また、四国の中枢管理都市として発展を続け、特に昭和63年の瀬戸大橋開通や平成元年の新高松空港開港、平成4年の四国横断自動車道の高松への延伸などにより高松市を取り巻く環境が大きく変化する中、平成11年4月、中核市に移行した。高松市とは国分寺を縁として、合併前の旧国分寺町から国内交流を続けており、本市にとって関係の深い都市である。

高松第一学園の愛称を持つ高松第一小学校と高松第一中学校は、平成22年4月に近隣の小・中学校が統合し、四国で最初の施設一体型小中一貫教育校として開校し14年目を迎える。元はそれぞれの地域に、3つの小学校と2つの中学校があったが、著しい児童生徒数の減少と学校規模の格差の広がり、学校施設の耐震性の懸念と老朽化などの問題から「高松市小中学校適正配置等審議会」において議論が重ねられ、統合が進められた。

義務教育9年間を見通した特徴的な枠組みとして、従来の6・3制とⅠ期からⅢ期による4・3・2制の融合がある。校訓である自立、友愛、創造の観点からⅠ期（1～4年生）、Ⅱ期（5～7年生）、Ⅲ期（8・9年生）ごとに目指す子ども像を定め、義務教育の9年間を一連の期間でとらえた教育を推進している。4つの壁（いわゆる「中1ギャップ」）と9歳の壁をゆるやかに乗り越えることができるよう、子どもたちの発達や課題を踏まえた適切な対応や支援を行うため、4・3・2制を取り入れた小中一貫教育が進められており、子どもの発達段階ごとに重視すべき課題もまとめられている。これらを踏まえつつ、個人差や子どもの気持ちを大切にした小学校から中学校への円滑な接続が図られている。

学級担任制を基本としながらも中学校教員による一部教科担任制や乗り入れ授

業を行っている。小中教職員による共同意識の向上について、共通の課題や目的意識を共有できるよう、小中の枠を超えた全教員による授業公開や授業参観、年間指導計画の共同作成など緊密な連携を図っている。小中の乗り入れ指導ができるよう、全ての教員に兼務辞令が発令されている。小学校の時に教えてくれた教員が中学校でも授業を担当することで、中学校での学習の不安も軽減され、中1ギャップの解消に努めているとのことであった。生徒指導などにおいても小中が連携した指導を行うことを目指し、普段は小中別の生徒指導委員会で情報連携を行うが、小中相互の連携が必要となる場合は、小中の生徒指導主事及び学級担任が、保護者・児童・生徒の情報を交換し、共通理解のもと対応している。

総合的な学習の時間については、独自の取組として「高松みらい科」と銘打ち、シビックプライドを育めるよう「環境教育」と「キャリア教育」を二本の柱として、学年ごとに主題を設け地域の方々に協力いただきながら地域について学ぶコースを設定している。6・7年生は合同で授業を行い、グリーンエコ、食育、まちづくり、ものづくり、国際文化、商店街のコースから1つ選び、高松市の未来や自分の生き方について、7年生がリーダーとなり話し合いや作業を進めている。

なかまづくりの取組として、「ふたばペア」と称し、異学年交流を行っている。ふたばペアは、1・5・9年生、2・6年生、3・7年生、4・8年生とし、学年が上がっても同じ仲間とペアになるように組まれている。このペア活動を活用し、児童生徒会が合同で企画したふたばペアあそびを年数回行っているが、互いが楽しめる活動を通して、ペアの友達とより仲良くなり、互いの関係が深まることを目的としているとのことであった。また、運動会は1年生から9年生までが縦割り3チームに分かれ、座席もふたばペア学年が隣にくるよう配置し一緒に応援するとのことであった。

児童生徒会の目標は「創（わたしたちがつくる わたしたちの高松第一学園）」で児童生徒自らの手で新しい学園、楽しい学園をつくっていこうという思いが込められている。小学校は児童会、中学校は生徒会が中心となり行事を運営しているが、小中合同で活動する行事も多いので、児童生徒連絡会で話し合いを行っている。

これまでの義務教育9年間を見据えた学習指導内容と学習システムの工夫・実践を踏まえ、コロナ禍を経た今、安心・安全で、魅力あふれる学校づくりを目指

した教育の三本柱として「人権・同和教育」「特別支援教育」「教育相談」を掲げ、次のステップに歩みを進めている。

5. まとめ

(1) 高知県南国市

エンジェルガーデン南国は、農薬や肥料、除草剤も一切使わない究極のオーガニックと言われる徹底した自然農法により、多種多様な生物や植物が自然のままに息づく空間を大切にしながら、半世紀前から高知で愛されてきた『在来種グアバ果樹』を農福連携で自然栽培し、産官学連携で美味しく機能性のあるグアバ食品を研究開発している。

自社工場で加工したグアバ食品は全国へ卸販売、自社インターネット通販、ふるさと納税などで販売し、SDGsに繋がる6次産業化が実践されている。6次産業化することによるメリットは、高品質な商品を安定して提供できるということと、施設利用者の仕事の種類や量が増えるということであった。自分たちが育てたグアバが商品になり、購入してくださる方がいて、その売上げが施設利用者の給料となる。

6次産業化で仕事の選択肢が広がり、様々な経験ができることが、自信や生きがいにつながるが、良い面がある一方で課題もある。障がい者といわれている方々が一生懸命作った商品だからと購入してくださる方もいるが、それでは持続可能にはならないということであった。エンジェルガーデン南国の目指すモノづくりは、「障がい者といわれている方々の生きがいと自立ができる環境を作ること」だけでなく、「高知大学での機能性の検証に基づいた学会発表での品質の保証」と「有機JAS認証や自然栽培、完全無農薬、無肥料、添加物を使わない安全安心」という要素が良いバランスで成り立っていることにある。単に、「障がい者といわれている方々が作っているから」という動機ではなく、「本当に良いものだから購入したい」と気づいていただき、さらにそこからリピートにつながれば持続可能となり、購入者も施設利用者もみんなが幸せな社会が実現できるとのことであった。

今回の視察先であるエンジェルガーデン南国での取組は、産学官による農福連携の成功例だと感じたが、代表の西川氏が特別支援学校で教員をしていたからこ

その熱い思いと、それに賛同するスタッフの熱量が相乗効果となり、ステップアップしていった過程を目の当たりにできた。また、数々の実践から、障がい者の方が生きがい・働きがいを感じて人間らしい生活を実感でき、心が安定した日々を過ごせるような行政の支援が必要だと強く感じた。本市とは環境も状況も異なるものではあるが、持続可能な農福連携の実現に向けては、地域の特産であるかんぴょうやイチゴなどを活用した新しい発想による商品開発についての研究も必要だと思われる。

(2) 香川県高松市

高松第一学園の整備に際しては、保護者、地域、学校及び教育委員会で構成された「新しい学校づくり協議会」が発足され、施設整備、学校教育や運営に関して、よりよい教育環境創出のため約4年半にわたって合計32回に及ぶ会議が重ねられたとのことであった。統合を進めるに当たっては、保護者や地域住民の方に理解を得るため、十分な説明会や意見収集の場が必要である。

高松第一学園は教育目標として「夢や目標に向かってたくましく挑戦する意欲をもった人づくり」を掲げており、開校以来、小中一貫校としての教育実践を重ね、その成果や反省を生かしながら学園の安定した基盤づくりが進められてきた。特に、「互いに認め合い支え合う自分づくり、なかまづくり、学級づくり、学校づくり」を通して、確かな学力の向上と豊かな心の育成に取り組んでいる。

印象的な取組である異学年交流の「ふたばペア」では、上級生は下級生に対する責任感をもち、下級生はペアとしての自分の役割を意識するなど、より好ましい人間関係の在り方を考える場となっているとのことであった。他にも1年生の入学式で9年生が手をつないで入場したり、9年生の卒業式で1年生がレイを渡したり、学園ならではの活動があった。

施設面では、教室も含めオープンスペースが多く、柔軟に対応できるよう自由度の高い設計となっている。図書館は小中で別だが、中階段でつながり行き来ができるなど、校内の随所に工夫が見られた。

これまでの成果としては、①9年間を見通した系統性のあるカリキュラムの実施や小中相互乗り入れ授業による学力の定着、②9年生の意識の高まり（学園のリーダーとしての自覚、学園の伝統を継承しようとする意欲）、③小中で連携し、

責任をもって9年間の義務教育に臨むという全教職員の意識の向上、④同じ施設で児童生徒の姿を見ることで、小学校教員は、将来の具体的な姿を見通した指導・支援、中学校教員は、細やかな指導・支援が可能になった、⑤小中の綿密な情報交換と連携した対応による、新たな問題行動の未然防止の5点が挙げられていた。

一方、今後の課題としては、①教職員の異動により、教育理念が見失われることがないように教職員同士の話し合いや指導の共通化を今後も継続していくこと、②児童生徒の実態や発達段階の違いを認識し、それに応じた指導の在り方を継続的に研修すること、③小学校への乗り入れ授業をより一層充実させること、④コロナ禍で中断していた活動を精選し、新たなステップへと進んでいくことの4点が挙げられており、子どもたちの望ましい成長を図るために、「無理なく・長続きする」、「教育的効果や価値が高い」小中連携が必要であると感じた。

高松第一学園のような「教育改革」が小中一貫校でないと進められないということではなく、小中一貫校でなくとも取り入れられる部分もあると思われる。本市においても、少子化対策の一つとして、子どもたちの教育環境の充実や今後の学校運営の在り方について、さらなる研究を進めたい。